

なぜ勉強するのか

インタビュー

川崎市立稲田中学校
教諭

国家資格キャリアコンサルタント / CDA

齋藤 茂氏

中学校



■自信を持ってない生徒たち

中学校で子どもたちを見てみると、どうも自分に自信を持ってない生徒が増えてきているように思うのです。自信がないから、主体性を持って、言われたことかしようにとしない「指示待ち人間」になる。中学生は学童期から青年期への移行期にあり、自分の興味の対象や価値観などが明確化されていないと、混乱した状態のままアイデンティティの確立がうまくいきません。

移行できないまま学童期に留まっている生徒が多いような気がします。

学校の教科というのは、基本的に自分たちが知らなかったことを知って、いく時間であるはずですが、授業をやっているにもかかわらず、驚きを感じられない。私は数学を教えています。「初めて知ったんだからもっと驚いて」と思っています。中学校は高校入試のための予備校のようで、いい点数、いい評価を取ればそれでいいというようになって

きている。

■学校生活の現状

クラス内の係にしても、生徒たちは分擔されたことだけやればいい、できればやりたくなくて、「あの子はやらないのに、なんで自分がやらなくちゃいけないの？」と言うわけです。やらなくていい理由を探している。いろんなことをやることは自分の可能性を拡げることにつながるのに、やったら損をすると考えてしまう。

部活動では、小学校までは準備されお膳立てされたお客さん状態でやってきたので、ギャップが大きいようです。活動すればいいだけじゃなくて、準備やバックアップをする人がいなければできないことをわかってほしい。

「委員会とか部活はミニ社会だよ」と何度も繰り返し言っています。生徒たちは「やりたくない」「やっても損だ」と思っています。学校生活の中でいろいろ経験することで、自分が何に興味を持てるのかがわかってくるようになります。緑化委員会や草花の世話をするうちに「植物を育てたりすることっていいな」と気づいたり、整備委員会で「何か修理するのが面白い」と思ったり。あるいは、自分が不得意なことに気づくことにもなる。すべて得意だということはないし、そうである必要もない。それは経験していかないとわからないし、「仕事」をイメージすることもできないですよ。企画したいなことが

好きなら、「じゃあ企画って何なの？」と具体的に知っていくきっかけになるのが職業レディネス・テスト(VRT)だと思います。

■家庭環境の多様化

家庭も変わってきています。両親はだいたい共働き。シングルペアレントも珍しくない。学習は塾任せ。塾に行っているけど安心する。行つてないと「行つてないからできないんだ」という言い訳をする。学習意欲の低い、家庭学習をしない生徒が増えている。少しの宿題でも、「塾に行くから時間がない」などと言つてやつてこない。一方で、環境ゆえに家庭学習がしたくてもできない、という子もいる。自分の机がなく、食卓でしかできない。昔より家庭環境は多様化のようです。

■自信、自己肯定感を持たせるために

できる子は心配ないのですが、おとなしい子、家で勉強できない子たちは気になります。委員会でも部活でも何か自信になることがあれば、「やるう」という気になってくれるのではないかと思います。有能感を持つためには、少しずつ「自分もできるじゃん」という小さな成功体験をさせ、褒め、それを積み重ねることです。ちょっとしたことで、その自信が自己肯定感につながります。頑張ればできるかもしれないと思いはじめます。

自己肯定感を持ってない場合、以前の校内暴力のように暴れることはなくなってきたんですが、学校に来なくなる子が多くなってきました。休めば休むほど勉強はわからなくなる。そうすると家でゲームでもやっていたほうがよくなってしまふ。

■VRTの導入

VRTは、まずは勉強の動機づけのために使いたいと思って導入しました。「今授業でやっている勉強も、実は将来仕事に就く時に役立つんだ、そのために勉強しているんだ」ということは折にふれて言うようにしているんです。「いずれ仕事に就くのだから自分の好きな仕事、興味のある仕事、できそうな仕事に就いたほうがいい。そのためにはどうしたらいいか。今のままでできるか」と。あるいは「ものを考えるには、まず基礎としての知識を得て、理解することが必要であって、今はその知識・理解の段階にあるんだよ」と。なぜ勉強するかをわかっていれば、頑張ることもできる。学習意欲が高まってくれば小さい成功の積み上げが自信になってくるでしょうし、いろんなことに興味が湧いてくるでしょう。中学生はまだ幼く不安定ですから、なんとか自信、自己肯定感を持てるようになってもらいたい。

VRT導入後は、教科のテストの点数ばかり気にするような感じではなく、なってきた気がします。VRTでは、

「ああ、こういう職業、仕事があるのか」というのがわかり、意識するようになります。

担任の先生が行う3年時の三者面談では、実際はほとんど高校進学の話ですよね。どこの高校にするか、まずは偏差値という感じ。将来何をしたいかという話は「それはとりあえずちょっと置いといて」となってしまうんです。

今回は、2年生での職場体験学習の前に実施しました。まず「なぜ勉強するのか」という話を全体でやり、それから検査実施、その後自己採点・集計、R I A S E Cの六角形を作るワークをして、振り返り、みんなで話し合う、という流れですね。今後は、1年と3年の二度実施してもいいかもしれませぬ。二度の結果の違いを比較すると興味深いです。成長しているはずですから。やっぱり一生懸命やると、興味も能力も変わる思います。成長を実感して自信につなげ卒業してほしい。

VRTの実施後のアンケートでは、「自分の思っている職業と同じもので良かった」「違うものもいんだと思つた」、あるいは「いろんな人がこんなふうにいるのがわかって良かった」というものがありました。

VRTは、「自分はこういうものに興味があるな」という自己理解のきっかけとなり、「それを将来仕事に結びつけていくには、もっと勉強しなきゃだめだな」と気づいて、学習意欲につ

ながっていく。自分でキャリアの気づきを得るために非常に良い検査ですね。

職場体験は、実際に受け入れていた多く事業所との連絡や、生徒同士の組み合わせ、「行かない」という生徒に「楽しいから行こうよ。まず行ってなんぼだよ」と説得したりと、いろいろ大変なんです。「仕事をすると大変なんだよ。簡単にはお金は稼げないんだよ」ということをわかってくれればいいかなと思います。行つたら行つたで子どもたちの目の輝きは違えますよね。授業の目とは全然違う。

■教師の意識改革

子どもたちにはキャリアの話をするんですが、一方で先生方にもっとキャリア教育の大切さ、必要性を理解してもらおうように私が努力をしなければいけないのかもしれない。

「齋藤先生はあ言ってるけど、なんでこんなことしなきゃいけないんだ、忙しいのに」と思っている先生もいると思いますよ。あるいは悩んでいる先生も。VRTに出会うまで自分もずつと悩んでいましたから。中学校は高校の予備校であって、余計なことしても無駄じゃないかと。でも、学校には無駄なもの一つもない。生徒自身にとつてチャンスがいたるところにこぼれているのだから、進んで「はい、やりませぬ」とやれば、その中で自分のいいところが見つけられる。でも実際

は、まずは目の前の宿題とか「怒られるから」といったことに気が向いてしまふ。それに気づかせるのが先生の役割でもあると思うんですが、先生方の心になかなか入っていけない。やつぱり難しいですね。

でも、何人かの先生に「研修でキャリア教育について話を聞いてきました。齋藤先生がいつも言っているのはこういうことだったんですね」と言われたことがあります。VRTも他の先生、学年主任の先生にメリットを説明し、校長の了解を得て、それで「じゃあやりましたよか」ということになったわけです。

■期待

自信のない子が多い、と申し上げましたが、本校の生徒たちは結構いろんなことを一生懸命やっているといます。部活も掃除も真面目にやるし、挨拶もする。私が顧問をしている水泳部でも、全国大会に行けない部員も、「自分に関係ない」とはならないで、苦しいけど頑張ろう、一緒に練習し応援していこう、という雰囲気がありますよね。委員会の活動でも一生懸命やってくれている。なので、もう少し負荷をかけてもできそうかな、と期待しているんです。そのためにも、勉強や学校での様々な活動の動機づけがうまくいって、より自信をもってくれれば、と願っているところです。